

氏 名	佐々木 勲人
学 位 の 種 類	博士（言語学）
学 位 記 番 号	博 乙 第 2949 号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学位論文題目	中国語授与動詞の文法化に関する研究

主 査	筑波大学	教 授	博士（ドイツ文学）	伊藤 眞
副 査	筑波大学	教 授	博士（言語学）	杉本 武
副 査	筑波大学	教 授	博士（言語学）	沼田善子
副 査	筑波大学	助 教	博士（文 学）	池田 晋
副 査	東京大学	教 授	文学博士	楊凱栄

論 文 の 要 旨

本論文は、中国語の授与動詞とヴォイス構文との関連を、文法化の観点から明らかにしたものである。受益文や受動文、使役文、処置文といった有標ヴォイス構文において、ヴォイス標識の役割を担う授与動詞が、どのような文法化のプロセスを経て、その機能を獲得したのかという問題に対して、中国東南方言の資料を駆使し、比較方言文法の観点から分析・検討を行っている。

ヴォイス現象は多くの言語において動詞の形態の違いとして反映される。しかし、形態変化の乏しい中国語では、ヴォイスの違いが動詞の形態の違いとして現れることはない。そのため、中国語学の分野では長年にわたりヴォイスという文法範疇が積極的に認識されることはなかった。本論文は、形態変化という手段を持たない中国語において、受益文や受動文、使役文、処置文といった有標ヴォイス構文がどのように構成されるのか、またそれらが相互にどのようなネットワークを形成しているのかを、「与える」という意味をもつ授与動詞がヴォイス標識を担う構文に焦点をあてて分析している。

本論文の構成は以下のとおりである。第1章「はじめに」、第2章「授与から受益への文法化」、第3章「授与から使役への文法化」、第4章「授与から受動への文法化」、第5章「授与から処置への文法化」、第6章「授与動詞とヴォイス構文のネットワーク：まとめと展望」。

まず第1章では、本論文の目的と研究方法が述べられている。本論文のアプローチのひとつである文法化の観点について著者の見解を示したのち、授与動詞とヴォイス構文の関係を明らかにする上で、東南方言の分析に基づく比較方言文法の観点が有用であることが主張されている。

第2章では、授与から受益への文法化について取り上げている。受益表現に関わる授与動詞の用法を本動詞型、補助動詞型、受給者後置型、受益者前置型、動詞句直前型の5種類に分類し、それぞれ

の形式の意味と機能について詳細な分析を行っている。本動詞から補助動詞、前置詞さらに動詞句直前用法へと至る文法化のプロセスを検証するとともに、東南方言の授与動詞には、一部の例外を除いて、受益者を導く前置詞の機能がないことが明らかにされている。

第3章では授与から使役への文法化について分析を行っている。呉語の寧波方言と閩語の福州方言を取り上げ、この二つの東南方言と共通語とを比較することにより、中国語における受益と使役の繋がりが明らかにされている。共通語の授与動詞が、授与使役に限定されているのに対して、寧波方言や福州方言では、許容使役にまでその表現範囲を拡げている状況を述べた上で、東南方言には許容使役のための使役標識が存在せず、このことが授与動詞の文法化を促進したという著者の主張が、豊富な用例に基づいて明らかにされている。

第4章では、第3章の考察をふまえて、授与から受動への文法化について考察している。東南方言の授与動詞が、授与使役から許容使役を経て、受動標識へと至る文法化のプロセスが詳細に検討され、東南方言における授与と受動の繋がりを解明しているとともに、授与動詞を用いた受動文がなぜ東南方言に多く、北方方言に少ないのかという疑問に対し、ひとつの答えを提示している。即ち、東南方言には許容使役を表すための使役標識が存在しないため、授与動詞が許容使役標識へと文法化を遂げた。このことが、受動標識への文法化をもたらした原因であると主張している。

第5章では、授与から処置への文法化について取り上げている。授与動詞を用いた処置文が東南方言の北部に集中して観察されることを指摘した上で、当該地域において広く観察され、ひとつの文の中で、授与動詞を二回繰り返して用いる受益文が、処置文へと拡張していく文法化のプロセスを、豊富な方言資料をもとに解明している。著者は、授与から処置への文法化とは、位置的变化から物理的变化への文法化に他ならないことを主張し、「与える」という意味の授与動詞がなぜ処置文を構成できるのかという問題に対して、先行研究とは異なる新たな解釈を示している。

最後の第6章では、本論文のまとめとして、授与動詞の文法化のプロセスと有標ヴォイス構文のネットワークを総括し、中国語の授与動詞には、潜在的に主題 (Theme) と着点 (Goal) という二つの意味役割を導く機能があること、即ち授与物であるモノを導く役割と、その受取手である人を導く役割があることが指摘され、そこからさまざまなヴォイス標識へと至る文法化のプロセスが明らかにされている。

審 査 の 要 旨

1 批評

本論文の分析全体を通して明らかにされていることは、ヴォイスに関わる中国語ならではの個別性と他の言語にも通じる一般性である。

動詞の形態変化という手段を持たない中国語では、意味役割と格表示の対応関係の変更を、限られた数のヴォイス標識が担うことになる。そのため、ひとつのヴォイス標識に複数の機能が集中する現象が生ずる。また、ヴォイス標識の多くは動詞が文法化を遂げたものであるため、地域によって、異なる動詞がヴォイス標識として選択されたり、文法化のレベルが不統一であるなどの現象が認められる。しかし、一見、地域間の差異が大きいように見えるヴォイス構文も、全体としては整然としたひ

とつのネットワークを構成しており、多くの言語にも通じる一般性を備えている。授与動詞を中心に上げた本論文は、ヴォイスに関わる中国語のそうした特徴を明らかにするとともに、従来の研究において未解決であった問題に対して新たな解釈を示したといえる。

本論文は、上述のような中国語自体の解明というだけでなく、方法論の上でも二つの点において高く評価することができる。ひとつは、文法化の観点から、形態変化を持たない中国語におけるヴォイス現象を詳細に分析し、従来の研究が解決し得なかった問題に、独自の解釈を与えている点である。授与動詞を用いた受動文や処置文が、中国東南方言に多いことは、これまでも多くの研究において指摘されてきたが、なぜ多いのかという疑問に対して、明確な解答を与えた研究はなかった。本論文の中で、著者により明確に示された文法化のプロセスは、そうした疑問に、ひとつの説得力のある解答を与えているといえる。

もうひとつは、豊富な方言資料を用いることにより、比較方言文法の観点から、授与動詞の文法化のプロセスを解明することに成功している点である。文法化とは、もともと実質的内容を表していた言語単位が、時間の経過とともに、機能語としての文法的役割を担うようになる歴史的変化と定義される。このような定義に従えば、共時的なデータのみから文法化を論じることには、おのずと限界があることになる。しかし、中国各地の方言を研究対象とした場合、それぞれの方言の通時的な口語資料を入手することがほぼ不可能に近いという現実の中で、著者は、本論文の中で、複数の地域の方言資料を総合的に分析することにより、共時的な資料に基づいて、文法化のプロセスに合理的な説明を与えることが十分に可能であることを見事に示している。

文法化と比較方言文法という二つの観点を駆使しながら、授与動詞とヴォイス構文の関連を明らかにしている点は、きわめて意欲的かつ斬新である。こうしたアプローチの仕方は、中国語はもとより他言語の研究にも、方法論的に新たな可能性を提供するものであり、今後のヴォイス研究に大きく貢献するものといえる。

その一方で、各章で扱われている方言について、若干、不統一な扱いが認められることや、一部地域の方言については、本研究の主張と、必ずしも完全に合致しているとはいえないデータなども認められるなど、今後の研究に残された課題も指摘される。しかしながら、これらの課題により、本論文の評価が棄損されることはなく、むしろ、今後は、本論文の主張をより完全なものにすることにより、ヴォイス研究の発展に大きく貢献することが強く期待される。

2 最終試験

令和2年1月10日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第10条（2）に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。